



運び点前より少し楽な卓（じょく）の点前。



右と上下はテノナル工藝百職。昭和初期の佇まいに工芸品が映える。



鳥丸通りにほど近い路地の奥の白のれん。覗かずにはいられない。



暮らす旅 京都

物欲そそる「工藝の都」

文・写真／松岡伸吾（暮らす旅舎）

秋号なのに、訪れた京都は残暑の真最中。熱帯低気圧が連れてくる豪雨と熱波に翻弄される日々も遠のき、ようやく秋が来た。しかし京都の暑さは格別だった。だるいほどの暑さでは動きはすべてスローテンポになる。ひと昔前なら、リサーチを兼ねて、新しい店でランチしなきやと思つたはす。せっかく行くんだから一日フルに使わなきやとか。ところが今では特に用がなければ朝はダラダラ。昼は必然的に車中弁当となる。最近の新横浜駅のおすすめと言えば「刷毛じょうゆ海苔弁当山登り」。妙に名前が長いけど、食べ飽きない薄味で、経木の弁当箱は



高知のにしのゆきさんの陶人形。猫と少女は大人気。竹村聰子さんの銀彩の器もおすすめ。



新幹線で食べた弁当。中味はぜひ買って見て。

ご飯も美味しい。海苔弁の「海」「山」「大漁」が定番だが、初めて銀鮨西京焼きにしてみた。今回のお茶は丸卓の稽古だったが、もう一つの目的は「京都手仕事帖」で紹介した工芸店。テノナル工藝百職は以前は聖護院の京大近くの裏路地にあった。その後、神戸北野の異人街に移つて残念な思いをしたが、この春再び京都にある百年近く経つ町家で、まだこんな住まいが残つてところが

京都らしいと感心する。壁も天井も建具もほどよく古びた空間に、一見バラバラな、でもどれも味のある陳列棚に、陶器やガラス、箸など主張しそぎない生活用品が並んで工芸ファンを誘う。オーナー自ら全国各地の作家を訪ねて、企画展を中心に展開している。聞くと三年先が展示予定という人気作家もいる。以前に43号で紹介した銀閣寺そばのヌヌカライフと同様に、見れば必ず欲しくなるモノに出逢える、危ない店ぶ

りは今も健在だ。今回は猫の置物や、銀彩のお皿などを手に入れた。とはいえ悩ましいのはその置き場所だ。日常使いはよく言つたもので、出しやすい場所に、使いやすい器をついつい置いてしまうので、気づけばいつも同じ器を使う羽目になる。もう置く場所がないと家人に言われるまでもなく、なんとかしなければ。ローテーションしやすい並べ方についてあれこれ、帰りの新幹線で思案に暮れるのだった。